

飛鳥坐神社(奈良県高市郡明日香村)

あすかにいますじんじゃ

ここが飛鳥座神社/背後は鳥形山



鳥居の右手前にある「飛鳥井」/古来より湧き出る井戸水で平安時代の歌集『催馬楽』にも詠まれているという



鳥居の左手前にある説明板



飛鳥堂神社 あすかに います じんじや

八重事代主神 飛鳥神空術 三日女神 大御主神 高皇產靈神

山姥

当神社の創建は定かではありませんが、古典によりますと、当神社祭神の事代主神は、大國主神の第一子で、因縁の懸信頼を受け、父神のご理窟にのられました。その後、首塚神として八十万の神々を統率し高市に遷り、この天高市（飛鳥）に鎮まりました。とあります。また、先代事代主神は、「大日靈神（大國主神）」は高津彥神を娶って一男一女を生み、その御子神である事代主神が、高市社である甘南備（飛鳥）に鎮座されている」と記載されています。なお高市とは、うでなの高（嶽）と呼ばれ、「小高い所にあるまつりの地」を意味するといわれています。

また万葉集の中でも「飛鳥の神坐處」は人々の信仰も篤く「千向けの山」として数多く謳われています。

日本紀略によれば、天長六年（八二五）高市郡置美郷にある神奈備山から、同郡阿蘇である、現在の地（鳥形山）に神託によって遷座されたことが記載されています。また、延喜式神名帳には「飛鳥社四座並びに名神大、日次、新島、相摩」と記され、当時の神社の格付けの中で上位に置かれていたことが伺えます。

古代より、國・民の重要な守護神として、この飛鳥に鎮まる当社には氏子はなく、創始以来代々お預りしてきた神主家は、神主本比古命が別天神天皇より「大神（伊弉諾）の氏姓を賜わり、「飛鳥」の姓で今に至っております。初代は、天事代主神から数えて七世に当たることが「世系図」や「新撰姓氏録」に記載され、現在の宮司は八十七代目に当たります。

御神徳
事代主神には、蘇味由八重事代主神、於玉事代主神、於玉事代主神、於玉事代主神と事代主神、という尊格があり、天地・宇宙に広がる御神徳が、八重に積み重なっている神徳です。

家内安全 商売繁盛 運運厄除 夫婦和合 身体健康 生育安全 子孫成道等の御神徳があります。

また「むすびの神」として、相ふさわしいものを結びつけると言われる御神徳は、子家、安産、縁結びの神として全国に広がっています。なお「創造・開拓の神さま」として芸術に携わる人々の信仰にもつながっています。

飛鳥坐神社(あすかに います じんじや)

御祭神

八重事代主神 やえことしろぬしのかみ 飛鳥神奈備三日女神 あすかのかんなび みひめのかみ 大物主神 おおものぬしのかみ 高皇産霊神 たかみむすびのかみ
由緒

当神社の創建は定かではありませんが 古典によりますと 当社御祭神の事代主神は「大国主神の第一子で 国譲りの際信頼を受け 父神のご相談にのられました その後 首渠神として八十万の神々を統率し高市に集まり この天高市(飛鳥)に鎮まりました」とあります また 先代旧事本紀には 「大己貴神(大国主神)は高津姫神を娶って 一男一女を生み その御子神である事代主神が 高市社である甘南備飛鳥社に鎮座されている」と記載されています なお高市とは「うてなの斎場」と呼ばれ 「小高い所にあるまつりの庭」を意味するといわれています

また 万葉集の中でも「飛鳥の神奈備」は人々の信仰も篤く「手向け

の山」として数多く謳われています
日本紀略によれば 天長六年(八二九) 高市郡賀美郷にある神奈備山から 同郡同郷である 現在の地(鳥形山)に神託によって遷座されたことが記載されています また 延喜式神名帳には「飛鳥社四座並びに名神大 月次 新嘗 相嘗」と記され 当時の神社の格付けの中で上位に置かれていたことが伺えます

古代より 国・民の重要な守護神として この飛鳥に鎮まる当社には 氏子はなく 創始以来代々お護りしてきた神主家は 神主太比古命が 崇神天皇より「大神臣飛鳥直」の氏姓を賜わり 「飛鳥」の姓で今に至っております 初代は 天事代主神から数えて七世に当たることが「世系図」や「新撰姓氏録」に記され 現在の宮司は八十七代目に当たります

御神徳

事代主神には「都味齒八重事代主神」・「於天事代於虚事代玉籤入彦殿之事代主神」という尊称があり 天地・宇宙に広がる御神徳が 八重に積み重なっている神様です

家内安全 商売繁盛 開運厄除 夫婦和合 身体健康 生育安全 念願成就等の御神徳があります

また「むすひの神」として 相ふさわしいものを結びつけるとされる御神徳は 子宝 安産 縁結びの神として全国に広がっています なお「創造・創作の導き神」として芸術に携わる人々の信仰にもつながっています

急激な石段を登ると神社の建物が見えてくる/正面左手は神楽殿/右手が西良殿



左手は神楽殿/右手が西良殿



振り向くとこちらは拝殿



拝殿正面から向こう側に本殿を見る







少し退いて見る





正面奥の建物が本殿



石段を下りて元の場所へ戻ろう



さて、ここは神社鳥居の右側のエリアで飛鳥東垣内(あすかひがしがいと)遺跡の場所/南北につながる大溝跡が発掘されているという





飛鳥東垣内遺跡

Asuka Higashigaito Ruins

平成11年(1999)年、飛鳥東垣内遺跡で7世紀中頃の幅約10m、深さ約1.3mの南北大溝が発掘された。この溝は飛鳥地域の中でも最大規模のもので、物資を輸送する運河と考えられる。また、飛鳥池東方遺跡や飛鳥宮ノ下遺跡、奥山久米寺の西方でも見つかっており、総延長は約1km以上にも及ぶ長大なものになる。

『日本書紀』をみると、齊明天皇2(656)年の条に石上山(天理市の豊田山)の石(天理砂岩)を運ぶために渠を掘って舟運で運び、宮の東の山に石垣を造り、石の山丘と呼ばれたことが記されている。時の人はこの渠を「狂心渠」と呼んでいた。「宮の東の山の石垣」とは、南方にある酒船石遺跡のことであり、この大溝も酒船石遺跡の東裾から伸びている。飛鳥東垣内遺跡の大溝は、その規模や掘削時期・位置からみて『日本書紀』に記載されている「狂心渠」の一部である可能性が高い。

In 1999, a large mid-seventh century ditch running north to south and measuring about 10m wide and 1.3m deep was excavated. This ditch is the largest known in Asuka, and is thought to have been a canal to transport materials and supplies. It has also been discovered in the Asuka-ike Toho Ruins and the Asuka Miyanoshita Ruins, as well as west of Okuyama Kumedera Temple, so its total length must have been over 1km.

According to the Chronicles of Japan for 656, a canal was dug to transport stone (Tenri sandstone) from Isokamiyama (modern Toyodayama in Tenri) by boat, with a stone wall built on the mountain east of the palace, so that it was called the "stone mountain". The people of the time called it the taburegokoro-no mizo (Wildheart Canal). The "stone wall on the mountain east of the palace" refers to the Sakabune-ishi Ruins to the south, and the large ditch also extends from the eastern flank of those ruins. Based on the scale of the ditch in the Asuka Higashigaito Ruins, the time it was dug, and its location, it is highly likely that it is a portion of the Wildheart Canal mentioned in the Chronicles of Japan.

明日香村



前方(南方向)へ幅約10m、深さ約1.3mの大溝(運河として利用されたい)が伸びているとのこと



参考ホームページ

<http://www2.ocn.ne.jp/~jinja/>

http://www.genbu.net/data/yamato/asuka_title.htm

<http://www.7kamado.net/asukani.html>

http://jingu125.info/2012/11/30/20121129_23232737649/

http://www.bell.jp/pancho/travel/asuka-ji/asukaniimasu_jinja.htm

<http://sakuwa.com/yw66.html>

